

## 露店商が彩る祝祭空間

### —北海道における「テキヤ」の実践—

角井美月

キーワード：北海道、テキヤ、実践知、実践共同体、正統的周辺参加

#### 要旨

本研究は、テキヤが今日も必要とされ生き残っている理由を明らかにすることを目的として、現代北海道におけるテキヤの実践に着目し、彼らは不安定な生業をどのように安定的に維持・再生産しているのか、テキヤの商世界を実践共同体(正統的周辺参加)、テキヤ個人の実践を実践知という概念から検討する。

本論文は8章構成である。

第1章では、本論文の研究の目的とその背景、論文の構成について述べる。

第2章では事前研究として本研究の対象である北海道のテキヤと、彼らが商売を行う祝祭的空間について基本的な情報や大まかな歴史について述べる。

第3章では先行研究のレビューを行う。第1節ではテキヤ・露店商に関する研究として人類学に限らない様々な学問分野での研究を紹介し、第2節では本論での理論的な枠組みの先行研究について、文化人類学者の田辺に依拠しながら人類学での「実践理論」研究の系譜を明示する。その中でブルデューの「ハビトゥス」概念がもたらした影響の大きさと、ハビトゥスの問題点を明らかにし、それを克服できる可能性を持つレイヴ/ウエンガーの「実践共同体」というモデルを提示し、実践共同体での学習過程である「正統的周辺参加」について説明する。また、人々の実践を支える「実践知」について述べる。そして第4章でこれらの概念などを踏まえた本研究の位置づけを改めて確認する。

第5章では本研究の調査概要と調査協力者である4名のテキヤの基本的な情報について述べる。

第6章では現代北海道におけるテキヤの商世界の再生産について、実践共同体(正統的周辺参加)を援用しながら明らかにする。第1節ではテキヤの商慣行について場所とネタの決定の仕方、価格の決め方に焦点を当て、テキヤへのインタビューや参与観察から得られた事例を紹介しながら分析・考察を行う。第2節ではテキヤ社会を再生産している集団構造と再生産の過程について、第1節と同様に事例を取り上げながら正統的周辺参加の概念から分析する。

第7章では個人の実践に注目し、実践において「メティス的な実践知」が発揮されて

いることを記す。

第8章では6~7章を整理したうえで研究設問に答え、今後の課題について述べる。現在「組合型」である北海道のテキヤ社会ではテキヤは個人事業主であり誰でも自由に参入できるが、テキヤ同士の争いを避けるための商慣行が、新人のアクセスを阻む要因となり自ずと新人は熟練者の下で一人前になるために働くという過程があることが明らかになった。これはレイヴ/ウエンガー(1993)の実践共同体での正統的周辺参加と捉えられる。家族経営でない場合、多くはバイトという形でテキヤ社会に参加する。そこで古参者に良い人材と認められ、本人もテキヤの面白さにのめり込み、古参者の下で働きながら学ぶことで一人前のテキヤに近づいていく。ここでの学びは実践の中で修得していく。しかも最初から責任の大きい仕事を任されることが多いのも特徴的であった。一方、場所のような資源や屋台での仕事以外の重要な仕事には新人は最初からアクセスすることが出来ず、長く働いて古参者の信頼関係を獲得し、交渉することで段々と任されるようになる。

テキヤの商世界は実践知を大いに発揮する場でもある。彼らは客を満足・納得させるため、日々違う環境や状況に適応するため、暗黙のルールに従いながらも個性を出して稼ぐための実践をしている。それは時に狡知な実践でもある。彼らは日々頭の回転の速さ、判断力で勝負している。

テキヤの商世界は、テキヤ同士の緩やかなつながりや助け合いによって安定的に維持・再生産されている。またテキヤは常に変化する不安定な状況の中で、他のテキヤや客と衝突しないようにしながらいかに上手く商売をするか日々頭を働かせている。このテキヤの実践が祝祭的空間の賑わい、奥深い味わいを再生産している。人々が集まる祝祭的空間がある限り、テキヤの商世界は維持・再生産され、テキヤは強かに商売を続けていくだろう。